築地居留地研究会　　2026年7月25日

ミッションで結ばれた築地と横浜

横浜外国人居留地研究会　斎藤多喜夫

はじめに

江戸時代の中等教育―藩校、私塾

洋学のための中等学校―民間で組織により運営、生徒を公募

①慶応義塾―明治元年4月、「芝新銭座慶応義塾之記」

②同文社―明治3年、川村敬三が横浜太田町で開校

③共立女学校―明治4年6月、アメリカ婦人一致外国伝道協会から派遣されたプライン、ピアソン、クロスビーが横浜山手に亜米利加婦人教授所（アメリカン・ミッション・ホーム）として開設

④中津市学校―明治4年11月、福沢諭吉の郷里で―「中津市学校之記」

⑤横浜市学校（通称高島学校）―明治4年12月、高島嘉右衛門が横浜で開設―「横浜町学校之記」

⑥フェリス英和女学校―明治8年6月、横浜山手に開校。メアリー・キダーの私塾から脱皮

Ⅰ．築地にあったミッション・スクールの例

1．サン・モール修道会と雙葉学園

《横浜》

1872.6.28, サン・モール修道会（幼きイエスの愛徳教育修道会）のメール・サント・マチルドらが来日→孤児の養育（→仁慈堂）と居留外国人の女子児童の教育（→ダーム・ド・サン・モール学校）を始める

1900, 日本人女子児童のため横浜紅蘭女学校開設→1951, 横浜雙葉学園と改称

1902, 仁慈堂、菫女学校となる

《東京》

1875, 築地新栄町に修道院設立。寄宿学校を開く。孤児養育→1882, 築地女学校（→仏国童貞学校）

1887, 麹町区下六番町に仏語女学校設立→築地明石町に移転、高等仏和女学校と改称→1888, 新栄町に移転→1896, 女子語学校と改称

1909, 築地に雙葉高等女学校開設。校長テレーズは父から受け継いだ莫大な遺産で麹町下六番町に新校舎を建設→翌年、築地から移転（現雙葉学園）

1933, 山上カク（修道名マルグリット）、菫女学校が関東大震災で倒壊したのち、田園調布に菫女学院尋常小学校を設立→太平洋戦争開戦とともに閉校

【参考文献】島田恒子「築地居留地45,46,47番―幼きイエス会修道女の35年間」（『近代文

化の原点　築地居留地』No.3〈築地居留地研究会、2004〉所収）／小河織衣『メール・マティルド―日本宣教とその生涯』（有隣新書、1990）

2．ヘボン塾・バラ学校・明治学院

《横浜》

(1) ヘボン塾

1860, ヘボン夫人クララ、宿舎の神奈川成仏寺で英語を教え始める→1863, 本格的なものとなる―明治学院創立の年

(2) キダー塾→フェリス女学校

1870.9.21, キダー、ヘボン塾でクラスを受け持つ―フェリス女学院創立の日

1874, 山手178番地に土地を得て校舎を新築→1875.6.1, 開校式。校名はアイザック・フェリス・セミナリー（日本名は布恵利須英和女学校）

(3) バラ学校

1875, ヘボンは聖書の日本語訳に精力を注ぐため、男子学生たちを長老派教会の宣教師ジョン・バラに委ねた→バラ学校

(4) 先志学校

1881, 神学校教育のための予備教育を行う学校。校長は改革派教会のワイコフ

《東京》

(1) 東京一致神学校

1877.10.7, アメリカ長老教会、アメリカ・オランダ改革派教会、スコットランド一致長老教会合同の学校

1881, キダーはフェリス女学校の経営から離れ、東京一致神学校教授に就任した夫ミラーとともに伝道事業に専念。築地に住み、日曜学校の教材となる雑誌『喜の音（おとずれ）』や『小さき音』の出版に従事した

(2) ジョン・バラの築地大学校

1880, バラ学校、築地に移って築地大学校となる→1883, 先志学校と合併して東京一致英和学校

(3) 明治学院

1887, 東京一致英和学校、東京一致神学校とともに白金に移って明治学院となる

【参考文献】中島耕二「宣教師ウイリアム・インブリーの築地居留地時代」（前掲『近代文化の原点　築地居留地』No.2〈2002〉所収）／原豊「築地居留地と明治学院」（同前No.4〈2011〉所収）

3．聖公会と立教学校

(1) ウィリアムズ主教

1874.2.3, 築地に礼拝堂と学校を開設→立教学校の源流

1876.11.29, 火災で焼失→神田・浅草で再建

1877.9.1, 湯島に立教女学校―ブランシェ夫人アニー（元共立女学校教師）が尽力

1878.11.1, 新栄町で立教学校再建

【参考文献】大江満『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』（刀水書房、2000）／同前「宣教師ウィリアムズ小伝」（前掲『近代文化の原点　築地居留地』No3〈2004〉所収）

(2) 横山錦柵

横浜でエリザ・ゴーブル、ヘボンに学ぶ

1870, アメリカ留学。ヴァージニア神学校で学ぶ

1877, 米国聖公会の執事按手礼を受ける→宣教師として帰国。神田・浅草で働く

1878, 立教学校で教える。川越で伝道→日本聖公会川越キリスト教会の淵源。この頃すでに心気症発症（重い病気に罹っていると思い込む精神疾患）→宣教師解任

1879, 命の親玉本舗開業→ヲツトセイ本舗

1880, 『大日本商人録・東京之部』→1881, 『横浜商人録』刊行

【参考文献】斎藤多喜夫「牧師から薬屋に転身　横山錦柵の数奇な人生」（『幕末・明治　横浜異人伝』〈未知谷、2026〉所収）

Ⅱ．共立女学校と桜井女学校

斎藤多喜夫「横浜山手居留地の乙女たち」（横浜外国人居留地研究会、2018.10.23）

同前「横浜居留地と共立学園」（全国居留地研究会東京大会、2018.11.3）

1．共立女学校の卒業生

(1) 教育者

桜井ちか―桜井女学校

渡辺カネ―帯広で開拓に従事。入植者やアイヌの子どもたちを教育

二宮わか―警醒小学校・中村愛児園など

高田敏子―高田女学校

北村美那子―文学者北村透谷夫人。豊島師範学校や品川高等女学校で教える

(2) 医師

岡見京―東京慈恵病院婦人科主任、サナトリウム衛生園

菱川やす・須藤かく・阿部はな―横浜婦人慈善会病院

(3) 看護婦

加藤まさ―東大病院内科婦長

(4) その他

福沢諭吉の３人の娘、姪の福沢きよ

井上馨の娘２人

2．女子学院の源流

1870, A六番女学校→原女学校

1874, B六番女学校→新栄女学校（居留地42番）

1876, 桜井女学校（麹町）

1878, 原女学校と新栄女学校合併→新栄女学校

1890, 新栄女学校と桜井女学校合併→女子学院（麹町）

【参考文献】山田美穂子「明治日本における女子教育とキリスト教教育の試みの一例：女子学院の歩み」（『総合文化研究所年報』23号〈2015〉所収）

3．桜井女学校と看護婦養成所

(1) 桜井ちか（1855-1928）

1876, 麹町に桜井女塾開設→1879, 桜井女学校と改称

1880, 牧師として函館に赴く夫に同行。桜井女学校は矢島楫子、マリア・トゥルーが運営を引き継ぐ。

1890, 新栄女学校と合併し、女子学院となる。

(2) リディア・バラ（Lydia Evelina Benton→Ballagh, 1829-1884）

1873.10.26, アメリカ婦人一致外国伝道協会の宣教師として来日。アメリカン・ミッション・ホームの教師となる。

1875、ジョン・バラと結婚

1878, 居留地39番地の宣教師館（旧ヘボン邸）に「お茶場学校」開設→1880, 住吉学校（旧ヘボン塾女子部）とともに住吉町教会の管理に

1882.10.20, 一時帰国。日本で肺炎に罹った時の経験から、日本での看護婦養成の必要を痛感し、長老教会に働きかけるが志半ばで死去→トゥルーが遺志を継ぐ

【参考文献】横浜プロテスタント史研究会『横浜の女性宣教師たち』（有隣堂、2018）

(3) マリア・トゥルー（Maria T.True, 1840-1896）

1874.11, アメリカ婦人一致外国伝道協会の宣教師として来日、アメリカン・ミッション・ホームの教師となる

1880, 桜井女学校の経営に当たる

1883, 一時帰国。ベントンの遺志を知る

1886, 桜井女学校内に看護婦養成所開設

1889, トゥルーの提案により角筈に職業学校として女子独立学校を設立、加藤とし子が運営に当たる。2代目校長は内村鑑三→角筈高等女学校→精華高等女学校→東海大学東海精華女子高等学校

1893, トゥルーと岡見京の協力によりサナトリウム衛生園開園→1896, 胃潰瘍のため衛生園で死去→1898, トゥルーの遺志により桜井女学校看護婦養成所を衛生園に移す。責任者は菱川やす

【参考文献】佐藤直子「伝道師マリア.T.トゥルー―日本の近代化に大きな役割を果たした外国人」（前掲『近代文化の原点　築地居留地』No3〈2004〉所収）／小桧山ルイ「マリア・ツルーの野心と挫折」（『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響』〈東京大学出版会、1992〉所収）／早川扶仁子『ツルー書簡集―日本女性の自立を求めて』（新教出版社、2010）

(4) 岡見京（1859-1941）

1881, 桜井女学校の教師となる。ここでマリア・トゥルーと知り合う

1884, 岡見千吉郎と結婚。岡見家は資産家で頌栄女学校を設立→留学のため渡米した千吉郎を追ってアメリカへ→ペンシルベニア女子医科大学で学ぶ

1889, 卒業、帰国→東京慈恵病院婦人科主任となる

1893, トゥルーと協力して角筈にサナトリウム衛生園を開設

1898, 桜井女学校付属看護婦養成所を衛生園に移す

【参考文献】松田誠「慈恵病院女医第一号・ドクター岡見京子」（『高木兼寛の医学　東京慈恵会医科大学の源流』〈東京慈恵会医科大学、2007〉所収）

(5) 加藤まさ（1857-1940）

1887, トゥルーの招聘によりアグネス・ヴェッチ（Agnes Vetch, ナイチンゲール看護学校を卒業したイギリス人）が加藤まさ・大関和ら桜井女学校看護婦養成所第一回卒業生6人を指導。加藤はヴェッチの通訳兼秘書を務める。6人は東大病院（帝国大学医科大学第一病院）で臨床実習

1888, 東大病院内科婦長となる

1891, 慈善看護婦会（日本最初の派出看護婦会）を設立

1896, 慈善看護婦会付属東京看護婦講習所を設立

【参考文献】松田誠「慈恵病院派出看護婦考」（前掲『高木兼寛の医学　東京慈恵会医科大学の源流』所収）

【余談】西沢八重と吉川一水

(1) 西沢八重

横浜で大川文次郎（シングルトン・ベンダ商会番頭）の次女として生まれる→麹町山元町西沢常次郎の養女→女子英学塾で学ぶ。内村鑑三の弟子となる→山内権次郎と結婚

1905, 幸徳秋水・山内とともに渡米。社会革命党結成に参加。山内の急死→帰国

(2) 吉川一水

麹町元園町で生まれる→内村鑑三・徳富蘆花の弟子となる

八重と結婚→聖書自由研究会主宰

研究会参加者の大竹章雄と娘の江すてるが結婚→娘の大竹しのぶ、女優になる

【参考文献】斎藤多喜夫「西沢八重と吉川一水」（『明治・大正・昭和　横浜で紡いだ家族の物語』〈未知谷、2026〉所収）

Ⅲ．青山学院の源流

１．美会神学校と東京英学校

1878, ジュリアス・ソーパー、耕教学舎を築地に開校→1881, 東京英学校と改称

1873, メソジスト・エピスコパル教会（美以教会）のロバート・マクレイ来日

1879, 横浜山手 221 番地に美会神学校設立→1882, 東京英学校と合併→1883, 青山に移転し、東京英和学校と改称→1894, 青山学院と改称

２．海岸女学校と聖経女学校

(1) ドーラ・スクーンメーカー（Dora E. Schoonmaker, 1851-1934）

1874 年、メソジスト監督派（美以）教会女性海外伝道協会宣教師として来日→麻布の岡田平蔵邸に女子小学校開校→救世学校（三田）→1877, 築地明石町に移転し、海岸女学校と改称→上級生は青山に移り、東京英和女学校となる→1894, 海岸女学校を閉鎖し、東京英和女学校に合併→1895, 青山女学院と改称→1927, 青山学院に合流

【参考文献】齋藤元子「海岸女学校―青山学院の源流」（前掲『近代文化の原点　築地居留地』No.3〈2004〉所収）

(2) カロライン・ヴァンペテン（Caroline Waughop Van Petten, 1854-1916）

エヴァンストン女子大学、マウント・ユニオン大学で学ぶ

1877, サムエル・ヴァンペテンと結婚。５か月後に夫が死去

1881, 美以教会女性海外伝道協会宣教師として来日、海岸女学校に赴任

1884.8, 日本美以教会創立第一回年会、横浜女子伝道学校設立計画、ヴァンペテンとベントン（Emma J.Benton）が担当→9.10, 聖経女学校として開校。校長ヴァンペテン。校舎はヒギンズ記念館と旧美会神学校の教師館と講堂。午前中は聖書の講読と解釈、訪問伝道の方法、日曜学校の教授法、午後は山手の麓の貧民街を訪問→1923.4, 日本女子神学院と改称→関東大震災後、青山学院に吸収され、神学部女子部となる

＊ヒギンズ：1878, 横浜に赴任したが、来日わずか９か月足らずで死去。美会神学校の跡地にヒギンズ記念館が建設された

【参考文献】斎藤多喜夫「伝道と慈善の生涯　カロライン・ヴァンペテン」（前掲『幕末・明治　横浜異人伝』所収）

(3) 稲垣寿恵子（1860-1931）

和漢学・数学・書道を学ぶ→1879, 東京の海野数学塾で漢学を教える→海岸女学校に転任。ヴァンペテンと知り合う

1884, ヴァンペテンに招聘されて聖経女学校で漢学を教える→その後、受洗

＊時田田鶴子「大凡市内の著名の士と云はるゝものは、大概一度は先生の勧誘に会つて居る。『あのお婆さんに会ては叶はないよ』とは我等の屢（しばしば）耳にする語であつた。二時間でも三時間でも滔々と説教をつゞけられるので、大概の人が兜を脱いだものであるさ

うだ」（森和平『露香』―稲垣の古希記念文集。露香は稲垣の号）

【参考文献】田中亀之助「貧民窟の愛の天使」（『回心物語』〈教文館出版、1933〉所収）

Ⅳ．美以教会員による慈善事業

１．貧困家庭の児童の教育

(1) 警醒第一小学校：1881, 横浜メソジスト婦人伝道会が設立。教師は二宮わか。アメリカ美以教会女性伝道協会の経営→1923, 関東大震災後、廃校

(2) 警醒第二小学校：1889、ヴァンペテンと二宮わかが計画し、二宮が設立。経費の不足分は美以教会女性伝道協会の補助→1921, 経費不足のため廃校

＊二宮わか：1881, 共立女学校卒業。二宮安次と結婚。警醒第一小学校の教師となる

【参考文献】石崎一惠編『二宮わか子女史小伝』（基督教婦人矯風会、1932）／中積治子「雷婆さんと呼ばれても―二宮わかと安次の社会事業」（『史の会研究誌』１号〈1991〉所収）

(3) 警醒学校附属児童教育所と保育所→中村愛児園

1899, ヴァンペテン、中村町八幡谷戸で封永生を記念する日曜学校を始める→警醒学校附属児童教育所。二宮安次はその近くにハンカチーフの縫製工場を設け、授産に努める

＊封永生：中国人。事業に失敗し、八幡谷戸の長屋でランプ直しの仕事をしていた。紙屑屋で買った聖書を読んでいるところを聖経女学校生徒に目撃され、ヴァンペテンに紹介されて信者になる→1898, 婦人慈善会病院で須藤、阿部らに看取られつつ死去

1919, 隣接地にヴァンペテン、二宮、稲垣らが託児部を設ける→警醒小学校附属保育所

1924, 震災で被害を受けるも再建。その後教育所は廃止、託児園のみ存続

1924, 関東大震災後再興、中村愛児園と改称→1931, 平野恒子が園長に

＊平野恒子：平野友輔次女。友輔は藤沢の医師・名望家。元自由民権運動の闘士・クリスチャン。恒子は青山学院神学部女子部出身。横浜保姆学院設立→横浜女子短期大学に発展。「神奈川の母」と呼ばれる

1933, 八幡町に新築落成。設計はヴォーリズ

＊ヴォーリズ：建築家・近江兄弟社（メンソレータムで有名）の経営者・伝道者。日本名一柳米来留。横浜での代表的作品：共立学園本校舎（横浜市指定文化財）

(4) 相沢託児園

1905, 戦時保育園としてヴァンペテンと二宮・稲垣が設立→1945, 空襲により焼失

1947, 本牧元町に高風保育園として復活

２．横浜婦人慈善会と根岸の赤病院

(1) 横浜婦人慈善会

1888, 二宮、ヴァンペテンとともに中村町の貧民状態を視察→救済の急務を痛感

1889.12.2, 羽衣町若柳亭で発会式。稲垣会頭、村岡繁子副会頭（のちヴァンペテンに替わる）。リンズレー、ラウダーら居留外国人間を奔走し、多額の寄付金を集める

＊リンズレー：フレーザー商会経営者夫人

＊ジュリア・ラウダー：ブラウン牧師長女。外交官・弁護士フレデリック・ラウダー夫人

【参考文献】斎藤多喜夫「開港の歴史とともに歩んだ　ジュリア・ラウダー」（前掲『幕末・明治　横浜異人伝』所収）

(2) 横浜婦人慈善会病院（根岸の赤病院）

1892.3.19, 横浜根岸病院として開設。会長稲垣寿恵子、院長広瀬佐太郎、医員は菱川やす

＊広瀬は十全病院院長。監督的立場か。菱川はアメリカで医学を学んで医師となった女性の第２号。第１号は岡見京、３番目は須藤かくと阿部はな、４人とも共立女学校の出身

＊アデリン・ケルシー：1885, 共立女学校校医→1891, 須藤かくと阿部はなをともなって渡米→1897, 再来日→須藤・阿部とともに横浜婦人慈善会病院で働く

【参考文献】広瀬寿秀『須藤かく―日系アメリカ人最初の女医』（北方新社、2017）／斎藤多喜夫「日系アメリカ人医師　須藤かく」（前掲『幕末・明治　横浜異人伝』所収）

前期：居留外国人に依存

後期：政財界夫人に依存。県知事夫人周布貞子、渡辺たま・田沼なる子・脇沢タミなど

1900, 社団法人→1913, 済生会に譲渡、済生会神奈川県病院となる

【参考文献】中積治子「根岸の丘の赤病院―横浜婦人慈善会を支えた女性たち」（『史の会研究誌』２号〈1993〉所収）

３．横浜訓盲院

1889, シャーロット・ドレーパー、宣教師の子息に会うため来日。直後に夫が死去。日本に留まる覚悟を決める

1892, 中村町の民家を借りて盲人福音会を組織

＊シャーロット・ドレーパー（Charlotte Pinckney Draper, 1831-1899）：美以教会の牧師の一族

「今より七年前、故ドレパル老夫人横浜に住はれし時、寒さ烈しき或る夜の事なりき、可憐なる一盲児のあんま上下三百文と淋しき声を挙てふれ行くを聞き、大に感ずる所あり、将来力の及ばん限り、日本盲人の友となりて之を助け、之が為に働かんとの決心を起されたり」（笠原武千代『常磐』第２号〈明治 32 年 5 月 15 日〉）

1899.4.7, 死去。1900, 子息ギデオンや妻マイラが遺志を継ぎ、盲人福音会を横浜基督教訓盲院に発展させる

1909, ヴァンペテン院長となる

1912, 竹之丸に移転

1916, ヴァンペテン帰米後、稲垣らの尽力で今村幾多を招聘、運営を軌道に載せる

1924, 横浜訓盲院と改称→1951, 横浜訓盲学院と改称